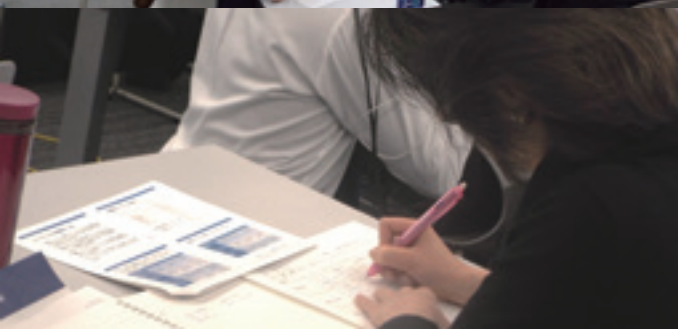
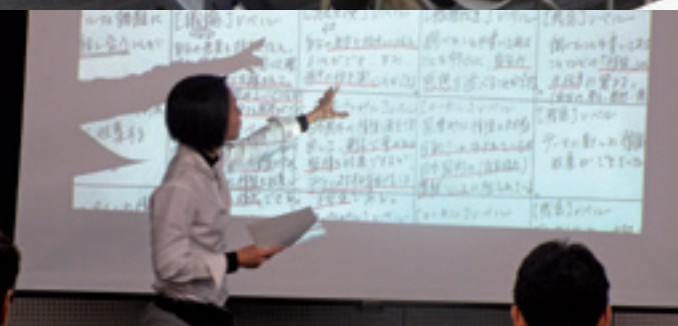




CONTENTS

副学長メッセージ

FDからSDへ、そしてPDに向けて ————— p. 2

全学FD研修会開催報告

ループリック作成ワークショップ ————— p. 3-4

ICTを活用した授業改革セミナー ————— p. 5

英語で授業を行うためのFD研修会 ————— p. 6

FD活動紹介

大学院担当教員（海外大学での博士号取得者）への

インタビュー ————— p. 7-11

学生FDチーム活動報告 ————— p. 11

FD推進支援室からのお知らせ

他大学との交流「関東圏FD連絡会」 ————— p. 12

FD推進センター活動報告／組織図 ————— p. 12

「FDからSDへ、そしてPDに向けて」

副学長 神田 雄一



新任教員研修会でのプレゼンテーション



教員研修会でのディスカッション



学生FDチームとのしゃべり場

本学のFD活動に少なからず関わってきましたので、平成20年3月刊行の「FD News創刊号」から平成28年9月発刊の第18号まで手元にあります。これを俯瞰的に眺めてみると本学のFD活動の経緯が理解できます。FD活動の義務化の流れの中から始められた本学のFD活動でありましたが、経済学でいうところの「後発性の利益」を十分に生かし、最近では他の大学からも注目されるまでに至っております。特にここ数年、学部・学科単位で教育の現場に近いところでの自発的なFD活動が増えてきたことは教育の質向上の観点からはとても素晴らしいことであると感じています。平成27年度にはFDに対する考え方の変化に伴ってFD推進センター規程の改正が行われ、本学におけるFDの定義を見直すと共に、職員のFD推進委員会への参画、学生FDチームの位置付けの明確化などがなされました。このことは従来、FD活動が教員を主体として行われていたものから、職員や学生も包含した三者による協働的な展開をする活動への転換を意味するものでした。これは正にSD活動と言っても過言ではないでしょう。学生は大学にとって最大のステークホルダーでありますから、学生の視点からの様々な意見、提案等について耳を傾け教育改善に繋げていくことは重要ではないでしょうか。その意味から、本学が進めている「学生FDチーム」の活動を今後とも見守っていただきたいと思います。

周知のように2016年に大学設置基準等の改正がなされ、本年4月からSDが義務化されます。ここで言うSDの対象は学校教育法上での職員であり教職協働を意味しています。大学経営の高度化に伴って活動領域が多様化する昨今、SD活動の改善と充実が必要なことでしょう。

近年、FDとSDの両者を統合するものとしてPD（Professional Development）と称する場合もあります。この主旨は教員・職員の双方が協働し、大学で働く専門職業人としての能力向上を目指す活動を指しています。PDには個人が主体的に個々の専門性を高める意味合いが強いように感じます。従ってSDと呼ぶよりむしろPDと位置づけた方が良いのではないかと思います。

本学においては教育の質の向上が大きな課題の一つですが、教員・職員がそれぞれのPD活動を通して自己を高め、教職協働により実をあげて欲しいものです。

本学における教育の質向上を目指した取り組みが継続的に進展することを願ってやみません。



TA研修会で講師を担当



講義スライドをブラッシュアップ
(一般教員FD研修会)



ルーブリックを作成し発表
(ルーブリック作成WS)

神田雄一副学長（教務部長）は、平成23年度から平成27年度の5年間にわたり東洋大学FD推進センター長を務められ、平成20年12月のFD推進センターの設置時より、本学の教育改革に多大な貢献をされてきました。FD推進委員会を『教員自らが教育について語る「場」』であると位置づけられ、大規模大学における組織的な教育改善のあり方がどのようにあるべきかを絶えず検討し、新制度の導入や規程改正など、委員の先生方とともに数多の取組みを進めて来られました。本年度末で退職を迎えられるにあたり、長年のご功績に敬意を表するとともに、これまでの本学へのご貢献に深く感謝申し上げます。

ルーブリック作成ワークショップ

教育改善対策部会長 千明 誠（経済学部経済学科）

開催日時：平成28年11月5日（土）13：00～16：00

会場：白山キャンパス8301教室

講師：北陸大学 未来創造学部教授／学長補佐
山本 啓一氏



北陸大学 山本啓一氏

11月5日(土)13：00～16：00に白山キャンパス8301教室（8号館3階）において「ルーブリック作成ワークショップ」を開催した。本企画は例年「教育改善シンポジウム」としていたものをワークショップ形式のセミナーとして実施したものである。ルーブリックについては、春学期に開催した「学部FD活動状況報告会」において、京都大学の石井英真先生より講演を頂いた。それを受けて、今回は担当科目に関連するルーブリックの作成を実際に体験し、来年度の授業設計に活かして頂きたいという趣旨で、北陸大学の山本啓一先生（北陸大学未来創造学部教授・学長補佐）に講師をお願いした。

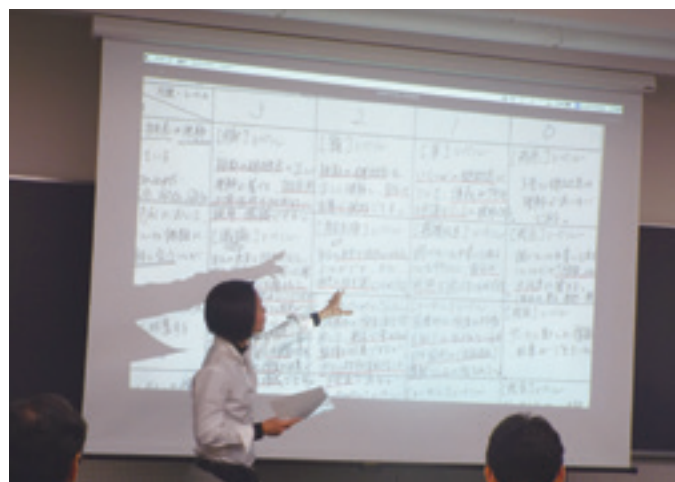
北脇秀敏副学長・FD推進センター長による開催挨拶の後、前半はルーブリックに関して、実践的な立場から、次のような講演をいただいた。



大学を取り巻く社会状況の変化と大学進学率の向上による学生の質の変化によって、大学のあり方は教員が学生だった時代と大きく異なっている。具体的には、大学で育成すべき力（学力）が知識中心から知識＋汎用的スキルに変化してきている。汎用的スキルの育成には経験の積み重ねが必要であり、これは学習の変化を必要とし、経験学習

がより重要視される。さらに、汎用的スキルは「身に付きにくい」「見えにくい」という特徴を有する。その育成のためにはできるだけ客観的・公正な評価が必要であり、ルーブリックは有用な評価手法と考えられる。評価にはいくつかの役割があるが、ルーブリックは学修の到達度（多段階）を示すことによって、学生の自己評価や振り返りを促し、同時にそのパフォーマンス評価として機能する。その他にも複数の教員による評価の差異を抑えるなど、ルーブリックには教員・学生にとっていくつかのメリットがある。ルーブリックには課題ルーブリック、科目ルーブリック、機関ルーブリック、コモンルーブリック、メタルーブリックなどの多様な種類があるが、形式に関しては、コストとベネフィットを比較して、利用目的に応じた柔軟な選択が可能である。

後半は参加者が実際にルーブリックを作成するワークショップを行った。ルーブリック作成プロセスについての説明がなされた後、課題ルーブリック、科目ルーブリック、実習ルーブリックのグループに分かれてルーブリックを作成した。作成後は数



参加者が作成したルーブリックを発表する様子



23名の教職員が参加

名が作成したルーブリックについて発表し、講師のコメントを通じて、ルーブリック作成のポイントについて情報を共有した。その中では以下のコメントが重要であった。達成目標は他科目との関連性を考慮して設定する必要がある。評価尺度は段階的に達成できる内容となるように工夫する。達成目標はディプロマポリシーとの関係を考慮して設定する必要がある。ルーブリックは作成後に複数回の修正が必要となり、それを絶えず行

うことでルーブリックの間主観性が保たれる。ルーブリックをディプロマポリシーやカリキュラムの見直しに利用することも可能である。

最後に教育改善対策部会長の総括によってシンポジウムは終了した。全学部から合計23名の教職員の方に参加していただき、内容に関しても肯定的な評価をいただいた。

参加者の声

早川 和宏（法学部法律学科）

成績評価。大学の教員となってから16年以上が経過しているが、これには常に頭を悩ませ続けている。もっとも、法科大学院の教員であった時は、比較的悩みが少なかった。それは、「司法試験に立ち向かえるだけの能力」という法科大学院生共通の目標との関係で成績を付ければ良かったからである。しかしながら、学部生には共通の目標がない。単位が取ればよい者、公務員試験・資格取得につなげたい者、大学院進学を考えている者etc.どこかに合わせて成績を付けると、どこかがいびつになってしまう。そんな悩みを抱えたまま、ルーブリック作成ワークショップに参加した。

ルーブリック作成は、①課題ルーブリック（レポート、プレゼンなどの評価）、②科目ルーブリック（科目の達成目標）、③実習ルーブリック（実習成果の評価）、④コモンルーブリック（学士課程全体で育成したいスキル）のうち一つを選択して行われた。私は、当初の問題意識から②を選択した。

ルーブリックは、縦軸に評価の観点を複数項目、横軸に評価の尺度を複数段階示し、その項目が交差するところに評価基準を書き込むことによって作成される。私は、「行政法Ⅰ」という科目について作成したが、縦軸を、a. 専門用語を知る・使う、b. 条文を使う、c. 判例を使う、d. 法的三段論法を使う、の4項目とし、横軸は1～4の4段階とした。c.の項目についていえば、1：著名事件名を知っている、2：事案の概要を知っ



発表の様子

ている、3：判旨を説明できる、4：判例を他の事例に応用することができる、という4段階にした。しかし、よく考えると、これは行政法Ⅰに限った評価ではなく、法律系科目全般に通じる評価である。a. b. d. の項目についても、私が考えた内容は同じような傾向が強く出ていた。これでは、②ではなく④である。この点は、報告時に講師の山本教授から指摘を受けるまで気付くことがなかった。

今回のワークショップを経て、「行政法Ⅰ」という科目を通じて自分が何をしたいのか（学生に何を身につけてほしいのか）が明確になったような気がする。これまで意識していなかったわけではないが、無意識に形にしたとでも言えばよいであろうか。もちろん、これによって当初の悩みが解消されたわけではない。しかしながら、自らの立ち位置を再確認し、今後の方向を模索する上で良いきっかけになったと思う。

アンケート（一部抜粋）

全体感想

- 科目ルーブリックの作成にあたって、ディプロマ・ポリシーとの繋がりを考えていなかったのが、各科目と学科全体との目標の繋がりの大切さに目を向けることができた。
- ワークショップで発表された他の先生方のルーブリックを通して、各先生方の意図するところや、学部として積み上げていくべき能力など、考えるべき点が明確になった。



ルーブリック作成過程

主催：全学カリキュラム委員会 共催：FD推進委員会 ICTを活用した授業改革セミナー

開催日時：平成28年12月3日（土）13：00～16：00

会場：白山キャンパス6321教室

講師：山梨大学 大学教育センター副センター長 森澤 正之氏
東洋大学 法学部法律学科 安藤 和宏氏

プログラム：第1部「反転授業を組み合わせたアクティブラーニングの実践」（森澤氏）

第2部「動画教材、その他授業教材における著作権、肖像権について」（安藤氏）

第3部「動画教材作成の支援について」（教務部・情報システム部職員）

セミナーは3部構成で開催され、第1部では反転授業を組み込んだアクティブラーニングの実践事例と実施のポイントについて、第2部では著作権法とICTを活用した授業が直面する課題について、第3部では学内LMSの機能と動画作成の方法について講演がなされた。学内外あわせて70名の参加があり、好評の声が多数寄せられた。



講演を終えて

安藤 和宏（法学部法律学科）

2016年12月3日（土）に本学で開催された「ICTを活用した授業改革セミナー」に第2部の講師として参加しました。私は法学部で知的財産法を研究していますので、本セミナーではICTを活用した授業を行う上で課題となる著作権や肖像権の問題についてお話ししました。具体的には、①著作権法の基礎知識、②著作権法における教育活動にかかる制限規定、③ICTの活用における著作権問題、④教材における肖像権の問題について説明した後、質疑応答を行いました。

現行の著作権法は1970年に制定されたものであり、毎年のように法改正はされるものの、eラーニングにはうまく対応していません。したがって、現行法の枠組みの中で権利侵害にならないように、うまくICTを活用する必要があります。このセミナーのために筑波大学や専修大学、山形大学の知的財産法の先生方からさまざまな意見を伺いましたが、各大学でみなさん、苦勞されているようです。

本セミナーでは、「ToyoNet-ACEに教材をアップして、インターネット上でアクセス制限し、受講している学生しかそれを見られないようにしています。受講生は50名程度ですが、問題がありますか」という質問に答える形で著作権法の解説を行いました。「50名は多数と考えられる（＝公衆となる）」、ただし「同一構内のネットワークであれば、公衆送信に該当しない」、「サーバーへの著作物の複製行為は35条（学校その他の教育機関における複製）の適用が可能」というように、著作権法の関連規定について詳しく説明しました。

そして、著作権問題を

クリアする具体的な方法として、①リンク・アドレスのみを貼り付ける、②代替物（フリー素材、自作素材）を利用する、③他人の表現に類似しないように利用する（アイデアだけ利用する）、④同一構内のネットワークでの配信に限定する、⑤引用による利用に限定する、⑥公衆に該当しない少人数クラスに利用を限定する、⑦著作権者から許諾を得る等を紹介しました。

最後に、教材における肖像権の問題について解説しました。ゼミ活動や研究活動の一貫として、学生や一般の方々の肖像を写真やビデオに撮影する機会が増えています。その一方で、肖像権に関する知識が教員や学生に定着しているとは言い難い状況にあります。本人の承諾・同意があれば、違法性が阻却され、肖像権侵害にはならないので、まずは撮影前に本人に承諾をもらうという手続が簡便かつ紛争を未然に防ぐ最良の方法であるとお話しして、私の講義を終えました。

講義後、参加者との間で大変活発な質疑応答がなされましたが、参加者の権利問題の意識の高さに驚かされました。今後もICTを活用した授業改革が促進されるように、知的財産法の専門家として、微力ながら尽力したいと思います。



アンケート（一部抜粋）

- 全てのプログラムが関連していて、「ICTを活用した授業を始めてみよう」という気持ちが高まった。
- ICT利用に係る問題として、著作権など、かゆいところに手が届くセミナーで大変勉強になった。
- 「攻めと守り」の両面をもったセミナーで、よい構成だと感じた。

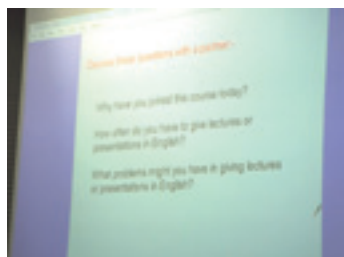


講演の様子

英語で授業を行うためのFD研修会

開催日時 : 平成28年 9 月12日 (月) 10 : 00~17 : 10
 会 場 : 白山キャンパス1503教室/1504教室 (1号館 5階)
 講 師 : James Caulfield/Rob Watson (British Council)

平成26年度より、英語で授業を行う教員に向けた研修会として、ブリティッシュ・カウンシルによる英語で授業を行うためのFD研修会を開催している。第4回目の開催となる今回も多数の受講希望者があり、クラスを増設しての開講となった。



参加者の声

劉 永鵬 (経営学部経営学科)

2016年9月12日に白山キャンパスで開催された「英語で授業を行うためのFD研修会」に参加した。今回の研修会は“English for Academics and Presentations”がメインテーマであった。講師のJames Caulfield先生の授業内容はとても分かりやすく、参加者にとっては楽しい時間であったと同時に、大変有意義な体験にもなった。

研修会は午前の部と午後の部によって構成されていた。午前の部では、参加者の自己紹介から始まり、プレゼンのタイプと注意が必要な点や、講義の構成、内容の展開に合わせて使われる英語表現、質問の投げかけ方や受け方などの場面別の表現、図表やスライドの有効な利用方法、さらに声の抑揚の付け方などが主な内容であった。午後の部では、参加者によるプレゼンが行われた。参加者はそれぞれ自分の専門領域よりテーマを決めて、5分間の発表を行った。発表の後にQ&Aの時間が設けられ、最後には講師の先生から参加者一人一人にコメントを書いていただいた。

私自身、英語には慣れていたと思っていたが、研修会の参加を通して、もっと効果的な講義を行うためにはさらなる勉強をしなければならないと気づかされ、また、よりよいプレゼンを行うためのテクニックも多く習得できた。本研究会は私にとって、体系的に学び直す機会となったことは間違いない。研修会で得たスキルをもとに、今後の教育ならびに研究に大いに生かしたいと考える。

今回の研修会は他学部の先生と知り合う好機ともなり、このことは自分にとってはもう1つの収穫となった。今後もこのような研修会に引き続き参加したいと考えている。改めて今回の研修会の機会を与えてくださった関係各位に感謝したい。

Thank you very much!



プレゼンテーションの様子

島田 恭子 (社会学部)

FD推進支援室より「英語で授業を行うためのFD研修会」のご案内をいただき、是非勉強させていただきたく思い、参加致しました。研修会は終日かけて、自己紹介から、文章の組み立て方、具体的な講義方法、効果的な資料の作成について学んだ後、参加者それぞれが10分程度のミニ授業（プレゼンテーション）を行う、という流れでした。初めて顔合わせする先生方との自己紹介ではやや緊張気味だったものの、最後のプレゼンテーションの頃には随分打ち解け、お互いの専門分野や学科紹介を、興味深く聞き合うことができました。

丁寧に教えてくださったWatson先生からは、プレゼン後一人ひとりへ個別のフィードバックをいただきました。英語でのクセや多用しすぎる言葉・表現など、自分ではなかなか気づき

にくい点をご指摘いただき、大変勉強になりました。

多くの気づきがあったこの研修は、英語で授業を行うためだけでなく、国際学会での発表や国際シンポジウム主催等、研究においても大変有益

なものになると実感致しました。今後はぜひとも、数日間の研修、もしくは複数回セッション等の形もご検討いただければ、より理解が深まると思います。このような貴重な機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



プレゼンテーションの様子

第2回!!

大学院担当教員（海外大学での博士号取得者）へのインタビュー

本取組は研究指導を担当された経験のある先生方へのインタビューを通して、様々な専攻分野がある本学の大学院の中でも共通する研究指導の在り方を見出し、大学全体で共有することを目的としたものです。インタビューは大学院の更なる国際化に資するため、**海外で博士号を取得**された教員を対象に行いました。



- ・インタビュー日時：平成28年11月16日（水）10：40～12：10
- ・インタビュー対象者：米原 あき先生（社会学部 社会学科）
- ・インタビュアー

小林 正夫先生（社会学部社会文化システム学科・FD推進委員（大学院部会長））
 山口 しのぶ先生（文学部東洋思想文化学科・FD推進委員）
 坂本 恵三先生（法務研究科法務専攻・FD推進委員）
 松丸 亮先生（国際地域学部国際地域学科・FD推進委員）
 荻野 剛史先生（社会学部社会福祉学科・FD推進委員）

FD推進支援室職員 2名

- ・米原先生のバックグラウンド

京都大学教育学部卒業後、同大教育学研究科へ進学。博士後期課程1年目で、米国インディアナ大学へ留学。

- ・取得学位

Ph.D.（インディアナ大学・アメリカ合衆国 2006年）

Q 留学をしようとされたきっかけを教えてください

当時、開発途上国の教育政策の研究をしていく中で、統計学と哲学を基本からきちんと勉強し直したいと考えようになったためです。統計学の面では恐らくアメリカが最先端であったということと、北米の大学院はヨーロッパと比較してコースワークが充実しているということが大きかったです。私はとにかく基本的なアカデミックトレーニングをきちんと受けたいという感覚が修士論文を書きながら強くあったので、北米への留学を決意しました。

Q 留学先はどのように選んだのですか

渡米にあたって、フルブライト奨学金を頂いたのですが、その審査が留学の大体1年前から始まるため、その時点である程度、留学先や指導教官について考えざるを得ない状況にありました。アメリカの幾つかの大学にいらっしゃる先生方の中で、

5名ぐらいに研究計画書のサマリーを送って、コンタクトを取りました。指導教員の専門分野が違っていると指導はできないということが体感的に分かっていたので、指導教官とのフィッティングは大事にしていました。大学の名前や学部の名前よりも、「この論文を書いている、この本を書いている、この人の下で勉強したい。」と決めた感じでした。最終的には、長丁場になる留学なので、お金のことであるとか、日本の大学院（修士課程）の単位がどの程度トランスファーできるかというところまで細かく、半年くらいかけてメールで話を詰めてから決めました。ですので、学生さんから留学の相談を受けるときは、準備は最低でも1年くらい前から始めたほうがいいよ、と言うようにしています。

Q 奨学金に関して教えてください

奨学金に応募するにあたって、自分の研究計画をいかに実現可能かつユニークで、価値のあるものとして見せるか、伝えるかにはかなり苦労しました。当然全部英語でやらなければいけなかったのですが、語学には、もうすごく、センター試験時代からずっと泣かされていて、実は奨学金をもらおうにも、英語のスコアが全然足りませんでした。フルブライトは唯一、当時のスコアでも一応出願はできる、「英語のスコアだけで人間を判断しません」というポリシーを持った、極めて稀有な奨学金でしたので、そこに出願しました。ただ、フルブライトで学費や生活費をフルカバーしてもらえるのは最初の2年だけなので、その後はGA（Graduate Assistant）をしたり、アメリカのスポンサー財団から奨学金を頂いたりしながら4年間をサバイブしました。

Q 当時の英語能力について教えてください

ゼミの後は毎回悔しくて泣いていました。言いたいことはあるし、やりたいこともあるのにそれがうまく表現できない。自分以外の学生たちがすごい勢いで、誰かが言い終わるか言い終わらないかぐらいのタイミングで、もう次の人が発言するので、

飛び込むチャンスがありませんでした。それにとてもフラストレーションを感じて、毎回「ちくしょう！」とハンカチをかむような時間を過ごしましたね（笑）。ですので、何を話しているか分からなくてもとりあえず議論に飛びこんで、英語で言いきれなくなったら、“How can I say in English?” とか言いながら、日本語でまくし立てて…ということをしていました。これ、サバイバル・イングリッシュって言うのかどうか分からないですけど（笑）。でも、そういうサバイバルの技術を身に付けたことが、その後の国際会議や、国際コンサルとしてやっていく中で非常に役に立ちました。

Q 授業数や課題は多かったのですか

修了には96単位ぐらいが必要で、時間的・予算的な問題から、何とか早いうちにコースワークを終えないといけないという意識が強かったです。ただ課題がものすごく多くて、ちょっと大げさですが、1セメスターに3、4コースを履修して何とか生命維持できる、というような状態でした。体力的に取り得るコースを一杯取って、夏休みなどの休暇中にも授業を取り続けて（注：アメリカの大学には休暇中にも集中講義があるところもある）、コースワークを進めていました。大学院は試験というよりはレポートや発表が基本で、日常的にたくさんのペーパーを書かされていたという印象が残っています。あるクラスでは、1冊分厚い本を読み、それに対するペーパーを書き、そのペーパーを事前に授業のウェブサイトにアップし、さらにクラスメイト2人以上のペーパーにコメントリーを付けるというのが毎週の課題でした。アメリカ人の学生たちも寝られないと言っていましたね。私も柔道式段で体力には自信のあるほうでしたが、実際過労で一度倒れて、生まれて初めて救急車に乗りました。

Q 授業と研究はどうやって両立していたのですか



米原あき先生

最初の1～2年ぐらいはコースワークに追われて、もう全く自分の研究ができない状態にありました。日本の感覚でいうと、博士過程の1年目は自分の研究のみをする時間なので、ものすごく焦りました。ただ、ある段階で諦めの境地とい

うか、悟りが開けてきて、「もう無心になって、今、目の前にあることに集中しよう」と光が下りてきた瞬間がありました（笑）。ただし、本を読んでいるときや、授業やゼミに出ているときのふとしたひらめきだったり、統計学の授業にしても「あ、こんなふうにこれが使えらるなら、あれができるな」というような、心の中でもぞもぞ思うことはあったので、そういうアイデアは忘れないように少しずつノートに書きためていました。

Q もう諦めて帰ろうと思ったことはありませんでしたか

多分そのような時が来るのだらうと思っていたのですが、意外に凶太い性格だったのか（笑）、常にどうしたらサバイブできるかということを考えていました。たとえば、本1冊が課題になっても1冊全部は読めないから、じゃあ自分はどの部分でなら勝負できるかと考えて、そこだけを徹底的に読み込んで補強していったって偉そうに発言するなど、ずるいことは多分相当

やっと思ったと思います。留学中に一番しんどかったのは、コースワークよりも、博士論文をまとめていて、筆が止まって書けなくなり、これだけやってきたことが本当に意義のあることだったのかとすごく悩んだときですね。でも、修了してからやりたいことがあったので、しんどいけれどここはステッピングストーンなんだからという意識は常にあり、そこから下りることは考えていなかったと思います。

Q 研究指導の先生について教えてください

4年間を通してお世話になったのは、マーガレット・サットン博士です。コースワークを終えて博士論文執筆資格試験（qualifying exam）を受けた後に、博士論文の指導教官を選び直すことができますのですが、私の場合は渡米前からいろいろと連絡を取っていたこともあり、ずっと彼女に見ていただいていた。渡米当初は、論文指導というよりも、コースワークを進めていく上で、どのようにコースを取れば最終的に博士論文につながっていくだろうかという相談をよくしていました。コースの選択は、博論の理論の枠組みや方法論の選択につながっていくので、振り返ってみれば、これが間接的に論文指導になっていましたね。彼女には、「この学生はきつとこういう論文を書くんだろう」というのがある程度見えていたのではないかと思います。ただ彼女はそれを「あなたはこうだからこうしなさい」というのではなく、「じゃあまずやってみて、自分で納得して進めなさい」というように、let it beでやらせてくれました。また、サットン先生は、研究室だと話にくいこともあるだろうからと、度々、近所のサンドイッチ屋さんや、時には先生のご自宅で、雑談のように研究の話ができる場を作ってくださいました。アメリカでは彼女のようなタイプがすごく珍しいというわけではなかったと思いますが、このように指導が受けられたことは、私にとってはとてもプラスでしたし、幸運でした。

Q 副指導教員のような先生はいらっしゃいましたか

コースワーク中の指導教員は基本的に1人でしたが、メンタリング（mentoring）という制度がありました。自分より前に在学している学生がメンターとなって後輩をサポートする制度なのですが、メンターは基本的に同じ指導教官に付いている博士の学生で、研究面でもコースワークのデザインの点でもいろいろ相談することができましたし、指導教官を含めた三者でコミュニケーションできるような環境がありました。

そして、博士論文執筆資格試験に受かると博論審査委員会（dissertation committee）が組まれます。その委員会のメンバーである5名の先生方から、それぞれの専門分野に応じて、必要な指導をいただくといった形になっていました。

Q 先ほどGA（Graduate Assistant）をお勧めだったという話でしたが、実際に学部の授業を担当したり補助したりしていたのでしょうか？

日本の大学院でも真剣に導入を検討していただけたらと思っているのですが、グラデュエート・アシスタント（Graduate Assistant：GA）とティーチング・アシスタント（Teaching Assistant：TA）というふたつのアシスタント制度がありました。TAは教育指導がメインで、学部の決まった授業を担当し、成績も付けるという非常勤講師のようなポジションで、GAは特定の先生に付いて、その先生の研究をサポートするリサーチ・アシスタントのような立場でした。GAも職務の一環として指

導をすることがあり、大学院の授業を代わりに担当することもありました。

GA/TAになると、まず授業料が全額免除になります。その上、月10万円ぐらいのお給料が出るので、生活に必要なお金はそれで十分カバーでき、研究費を外部の財団等から取ってくれば、なんとか博士論文は書けるという状態になります。ですので、博士課程の学生は基本的には全員がそのポストを狙っていました。採用は、教員が学生に声をかけるという形が多かったもので、どの学生も常に「私にはこんな能力がありますよ」と先生にアピールしていました。そういう意味では、非常に競争的な空気があったと思います。

Q 学習環境や生活環境はどうでしたか



日本では普通にある大学院生の研究室が、向こうにはありませんでした。ただ、いくらお金払うと図書館のマイデスクをレンタルできて、借りた本を持ち帰らなくても置いておける仕組みはありました。図書館は歩くと筋肉痛になるぐらいの広さで、日本の

メジャーな漫画が全巻揃っているくらい、膨大な蔵書があって、心が疲れるとそこに行って漫画を読んでいた(笑)。あとは、大学が世界屈指のミュージック・スクールを持っていたので、劇団四季の四季劇場レベルの施設が学内にあり、毎日のように気軽にクラシックを聞いてから家に帰るといったようなことが可能でした。また、何より、友情にはすごく恵まれました。未だに家族ぐるみで仲良くしている友達が、アメリカにもそれ以外の国にもいます。大変なのはみんな一緒だったので、ある意味戦友のような感じでした。そういえば、在米中に日本にいた夫と結婚し、日米の遠距離で結婚式を挙げられなかったのですが、友人たちがウェディングシャワーをやってくれたことがよい思い出として心に深く残っています。

Q もともと大学教員を目指して博士課程に進んだのですか

もともとはUNDP(国連開発計画)の職員、つまり国際公務員になりたいと思っていました。ただ勉強しているうちに、“how”の問いと、“what”や“why”の問いは違うんだということに気が付いてしまって。いかに(how)発展途上国の就学率を上げるかとか、いかに(how)死亡率を下げるかという、国際機関やプラクティショナーの思考様式と、そもそも教育とは何か(what)とか、なぜ(why)途上国で教育なのかということを考えるのは、問題の質が違います。コースワークを進めながら論文の方向性を考えてく中で、「ああ、私はこっち(what・why)の問いに目をつぶってhowにのみ従事することはできないな」ということに気付いてしまい、研究者の道を進むことにしました。幸いなことに、今は、研究者として、JICAのプロジェクトなど現場の“how”にかかわる機会も得ることができています。

Q もし先生の学生が留学相談に来たとしたら、どんなことをアドバイスされますか。

何のための留学なのか、留学することが目的なのではなくて、その先に何をを目指しているのかということを知りたいし、考え

ていただきたいなと思います。あとは、博士の場合であれば、「誰」の下でどのような研究をしたいのかというのを徹底的に明確にしないと、行ってからがすごくつらいので、そこを大事にしていきたいです。最低限、指導教員になっていただきたい先生の著作をしっかりと読んだうえで自分の研究計画を再検討するなど、十分に準備をしていただきたいと思います。その上で、そもそも本当に留学が必要かどうかを再考するぐらい根本的なところから考え直したほうがいいよと、博士を目指す学生には言うと思います。

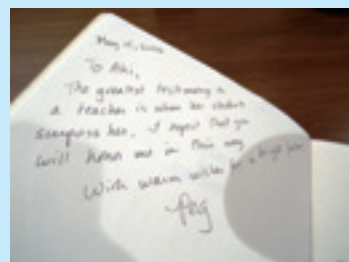
修士の学生に関しては、逆にあまり「私は絶対これをやる」と決めてかかるのではなく、もう少し肩の力抜いて、自分の関心のあるエリアのサブエリアや周辺エリアが充実しているプログラムを探すことを勧めます。アメリカの大学院の教育制度はコースワークが非常に充実していますので、コースワークによって未知の領域の可能性が開かれる確率が高いと思うからです。「卒論を書いてみたら、こういう分野が好きで、それに学術的に関わっていきたいと思うようになった」というスタート段階の学生に、玉手箱のようにいろいろな可能性や方向性を見せてくれるのがコースワークではないかなと思います。あとは、フィージビリティの問題ですね。実際の生活環境や、必要経費や、日本からの交通の便や、場合によっては日本の大学院からの単位のトランスファーなど、そういった現実的な点についても考えるようアドバイスします。

Q 指導教員の先生のご指導が、現在の学生指導において、ご自身の中で生きていると思うことがありますか。

指導教官のサットン博士からは、学生との関係の作り方や、学生の潜在能力を信じるということ、それが教育の大前提にあるということ、学びました。卒業・修了のために必要だから論文を書くというのではなく、「こんなに面白い世界があるのか、じゃあ一生懸命やってみよう」と学生が自ら思ってくれるような指導を行うためには、教員と学生の間の強い信頼関係が必要です。そのような信頼関係をどうやって築くかというところが、とても重要だと思っています。

また、どのような学生でも絶対に何かに対する関心や、意識を持っているはず。それを掘り起こしていくのが我々教員の仕事で、新しいことを教えてインプットすることだけが仕事ではない、ということも彼女から学びました。学部1年生の学生であっても、やはり私にとっては「畏るべき後進」です。その学生が持っているものにどれだけ気付いてあげられるか、本人も気付いてないその鉱脈を掘りあてるための道具をどれだけ提供してあげられるかというところが、論文指導の大事なところだと思っています。

指導教官から贈られた本に書かれたメッセージ“The greatest testimony to a teacher is when her students surpass her. I expect that you will honor me in this way.”(教師であることの最上の証は、教員が自らを越えて行くことです。あなたは、そのようにして私を誇らしく思わせてくれることでしょう。)



- ・インタビュー日時：平成28年10月25日（火）17：00～18：30
- ・インタビュー対象者：安藤 直子先生（理工学部 応用科学学科 教授）
- ・インタビューアー

吉本 智巳先生（理工学部 電気電子情報工学科・FD推進委員）

喜岡 恵子先生（総合情報学部 総合情報学科・FD推進委員）

- ・安藤先生のバックグラウンド

お茶の水女子大学家政学部卒業後、同大学家政学研究科へ進学。修士課程2年目で、オレゴン州立大学へ留学。

- ・取得学位

Ph.D. (Oregon State Univ. オレゴン州立大学 1994年)

Q 進学されたきっかけとその理由を教えてください。

きっかけは、体調があまり良くなくて、医者にも場所を変わった方が良いと言われたことです。父も研究者だったのですが、その時、父の研究室にたまたまサバティカルでオレゴン州立大学の先生がいらして、その先生と話しているうちに前向きな気持ちになったんです。願書を送るために必要な試験を受けたら通り、行ってみようと思いました。大きなフードサイエンスの学部があったので、そこへ願書を送りました。ただ、希望する指導教員は全然決めていなくて、その学部の学科長が毒性学を専門にしていたので、毒性学ってその時初めてスペリング



安藤直子先生

(toxicology) を見たくらい全然知らなかったんですが、その人が最初に手紙を見るに違いないと思って、「私は食品毒性学に関心がある」と書いて出したんです。ちょっとふざけた話なんですけど、後になって振り返ってみると、私にはすごく面白い学問でした。

Q 言語で苦労された点について教えてください。

留学までの準備期間が、半年とそれほど長くなかったこともあり、英語がほとんど話せなくて聞けなかったんです。オレゴン州立大学の中にEnglish Language Instituteという英語を教わるための施設があったので、夏休みに行ってみました。だから最初は大学院に行かずに英会話スクールに入りました。苦労はやっぱりかなりあって、とにかく聞けなかったので、授業の前に教科書で話されそうところを見当付けてたくさん読んで行きました。語学の面でついていけるなと思うようになったのは2、3年経ってからだったと思うんですが、勉強することも難しくなっていたので、並行移動という感覚でしたね。

Q 研究指導の先生について教えてください。

私にはスーパーバイザーが2人いて、1人がウィリアムス、もう一人はベイリーという先生でした。ベイリーは厳しくてウィリアムスは優しくかったので、補い合うような関係でした。ベイリーは学生の能力をあまり考えずにどんどん進めるタイプで、結構大変でしたが、私にとってはすごく印象的な先生でした。

た。私は先生が「こうなるはずだからやっpegらん」と言ったことが、そうならないことが多かったんです。上手くできていないんじゃないかと思って、最初はそれがすごく辛くて。そして彼に、「いや、もしかしたら君が正しいのかもしれない。重要なのは、どちらが正しいかが分かることなんだ。」と言われたんです。「そうか。じゃあ先生が言った通りにならなくても、真実がそうだったらそれでいいんだ。」って。その時に、科学がそういうものだ気付いたんです。自分が指導する立場になった今は、学生さんに同じことを言うようにしています。自分もそうでしたが、学生さんは自分が正しいかもしれないとはあまり思っていないようなので。自分にとっては、サイエンスの在り方を知るためのきっかけになったと思っています。

Q 研究指導の先生のご指導の中で、ご自身の指導に繋がっている部分はありますか。

先生方がよく、自分が何をやりたいのかよく考えろと言っていました。留学中にすごく忙しく勉強して研究してとなると、周りが見えなくなってしまう時があるんですが、「将来何をしたいのか、何をしてどんな生き方をしたいのかをよく考えないと駄目だ」と。気付くと、自分も学生さんに同じようなことを言っていますね。

Q 論文指導・執筆について教えてください。

進め方を明確に指示されるというよりは、自主的に研究を進めて、課題につまづいた時にアドバイスをもらうような指導でした。論文のテーマは最初はあまり決まっていなくて、研究を4～5年やり、面白いデータが出ることが分かってからタイトルを付けたような気がします。博士論文は、書き始めてから数カ月で完成させました。それまでずっと研究と実験、それと博士論文とは別の原著論文を書いていて、それらを流用する形で博士論文にしました。時折、学会発表の機会もありました。

Q 論文審査のプロセスについて教えてください。

まず、授業を大体取り終えた頃に、博士課程へ進むための qualifying exam という筆記・口頭試問がありました。どちらか一方でも2回落ちてしまうとドクターには進めないのですが、これが結構難関でした。論文審査



博士論文・学位記

については、はじめに主査と副査のみによる予備審査があり、通過すると公聴会が行われますが、これは日本と同じように完全公開で、仲間の学生や先生方、共同研究者などが参加できます。それに続いて口頭試問が行われるのですが、落ちる人が一定数いる厳しいものでした。その後、論文の修正点について話があり、そこまで来てようやく「受かったかも」という気持ちになったのを覚えています。そのあたりは、日本と少し違う点かもしれません。

Q 留学中のご苦労について教えてください。

研究中はスランプがありました。酵素の実験をしていたのですが、1年くらい何をやってもうまくいかなかったんです。結局、その原因は使っている溶媒の濃度が高すぎたことだったんですが、先生方も私が溶媒のことを言わないから、どうしてきれいなデータが出ないのか、活性が出ないのかが分からなくて、先に進めなかったのがすごく辛かったです。ある時に、誰か他の人が話しているのを聞いたのか、これって溶媒の濃度が高いんじゃないかなと思って、変えてみたらそこから急にうまくいくようになったので、結局気付きで乗り越えた形になりました。ちゃんと説明していれば先生方はきっと溶媒の濃度が高すぎるよと言ったと思います。自分がプロトコルを持っているので、自分じゃないと分からないところだったのかもしれないです。そこからは1年遅れているという意識から、必死で研究を進めました。

Q 寮や研究室の仲間について教えてください。

寮では、よくパーティーをやっていました。当然寮なので、壁がすごく薄くて、騒がしい音はよく聞こえてきました。ただ、違うものは違うと思っていたので、文化の違いでストレスを感じるというよりは、むしろ周りの人と一緒にご飯を作って、普段と全然違うもの食べたりして、結構楽しかったです。なので、寮にいて良かったなと思います。

研究仲間には、随分助けてもらいました。私は日本で1年大

学院へ行っただけでオレゴンに行っているの、年齢的にもどちらかというと他の学生よりも下でしたので、アドバイスは随分いただきました。英語が得意ではないので、先生に見せる前に直してもらって、直したものを先生に出してそこでもまたいっぱい直されて返ってきました。仲間同士の励まし合いは結構あったし、よく遊んでいました。遅くなるが多かったので、何か食べに行ったり、一緒に料理したりすることが結構あったので楽しかったです。あとは、具合が悪くなった時に、私車を持っていなかったで病院に連れて行ってもらったとか、そんなことも自分1人だったらすごく大変だったんだろうなと思います。今思い出すと、その人達に支えられた部分が大きかったんじゃないかなと思っています。



インタビューの吉本先生・喜岡先生

Q 最後に先生の研究指導のモットーを教えてください。

やっぱり自分が望むことは、学生さんたちが面白いと思って興味を持って研究してくれることです。私が今学生にやってもらっていることがそのまま社会人になって役に立つということとはほぼあり得ないと思います。それでも、それをやることに何らかの意味があって、それを楽しく追及していくみたいな心持ちで研究してもらえれば、嬉しいかなと思います。

学生FDチーム活動報告

学生FDチーム代表 齊藤 克弥（社会学部4年）

今学期は、札幌大学主催「学生FDサミット2016夏」への参加、「新入生向けラーニングチップス」の作成、「第4回 東洋授業への声コンクール」の実施に取り組みました。

4回目となる「東洋授業への声コンクール」では、「あなたの視野・世界が広がった授業とは」というテーマで作品を募集しました。応募作品から「知識を得るだけ」でなく、「知識から新たに気づきを得る授業」というものが作品に多く取り上げられていると感じました。

表彰式では、受賞者の方と座談会を行いました。座談会では

「ただ知識のインプットをするだけでなく、先生や他の学生と議論しながらアウトプットを行うことができる授業が良い」などアクティブラーニングを望む声が多く聞かれました。入賞作品はホームページに掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

学生FDチームは、教職員の方々のご理解とご協力が不可欠な活動です。今後も学生の視点に立ち様々な角度から東洋大学の授業・教育をよりよくする活動に努めてまいりますので、ご支援どうぞよろしくお願い致します。



授業への声コンクール座談会の様子



授業への声コンクール授賞式の様子



12